

「幸運の手紙」についての考察

A Study of the Chain Mail
MARIYAMA Yasuaki

丸山泰明

はじめに

郵便メディアを介して幸運あるいは不幸が人から人へと連鎖していくとする呪術的な要素をもったうわさが存在する。唐突に誰かから手紙や葉書が届き、受け取った人間が文面を全く同じに書き写して複数の誰かへと差し出せば幸運が舞い込むが、連鎖を断ち切ると不幸が訪れるとするものである。本稿はこのような手紙や葉書について「幸運の手紙」と総称して考察する。日本では一九二〇年代以来、「幸運の為に」「幸運の手紙（葉書）」「幸福の手紙（葉書）」として、しばしば爆発的な流行をともしながら行われてきた。なお今日ではむしろ「不幸の手紙」として世に知られているが、幸運から不幸への転換は後述するように戦後の一九七〇年代の頃に起こったものである。

「幸運の手紙」についてはしばしば論理的・倫理的な観点から批判されてきた。科学的に根拠がない、人の心の弱みに付け込む悪質なはずらだ、仮に文面が指示する通りにそれぞれが複数の人間に差し出せば

たちまち天文学的な人数になってしまい荒唐無稽だ、差し出すための便箋・葉書・切手代がもったいなく大きな経済的損失だ、というわけである。このような批判は本稿でものちに見て行くように戦前から新聞などのマスメディアによってなされてきたし、⁽¹⁾時には警察も介入して取り締まってきた。

しかし、このような批判は公序良俗を維持するという意味では確かに妥当かもしれないが、それ以上の意味はないだろう。本稿で試みようとしているのは論理的・倫理的な批判はいったんカッコにくくって脇に置き、「幸運の手紙」の実態に迫り文化的・社会的な意味について考察することである。

「幸運の手紙」は著名でありながら、その知名度に比べて客観的な研究はこれまでほとんどなされてこなかった。数少ない研究の一つとして、大島広志が『幸福のEメール―日本の現代伝説』の「メディア」の章において取り上げている。⁽²⁾一九九八および一九九九年に主に東京の大学生から提供した資料をもとに考察したものであり、手紙・葉書などの従来

の郵便メディアのみならず当時の一九九〇年代半ばから一般に普及し始めたパソコンや携帯電話による電子メールの事例も取り上げている。また「不幸の手紙」が読み書きの過程で「棒の手紙」に転化した例（「不幸」↓「木幸」↓「棒」）など取り上げられているものは多様であり博覧会的な面白さも有している。同時代のものに幅広く視野を広げている強みを持っているが、他方では歴史的な経緯や変遷への関心が欠けている面もある。

情報工学を専攻するC・H・ベネットらによる研究は、生物分子学においてゲノムの系統樹を推定する際に用いるアルゴリズムを「幸運の手紙」の進化の過程の解析に適用した、きわめてユニークなものだ。⁽³⁾「幸運の手紙」は書き写す際に無意識的に書き間違い、あるいは意図的に書き換えられ、様々なヴァリエーションが生まれてくる。その進化の過程はあたかも遺伝子の配列の変化によって様々な種が生まれてくる生物のようである。そこでアルゴリズムを用いて遺伝子の配列を解析し哺乳類などの生物進化の系統樹を作成するように、「幸運の手紙」の文面における文字の配列をアルゴリズムを用いて解析し進化の系統樹をつくった。分析の対象となったのは一九八〇年から九五にかけて集められた三三通の英文の「幸運の手紙」である。分析の結果あきらかになったのは、分子生物学では当たり前の現象が無機物であるはずの「幸運の手紙」でも起きることだった。例えば生物の場合酵素の活性部位がほとんど変化しないように、「幸運の手紙」も書き写す、他人に差し出すといった存続に不可欠の部位は全く変異しない。だが、誰にどのような不幸が起きたかというような人名や数字などの融通の利く部分では変異が多く、またもともとほとんど意味がない部分でも間違いが起こりやすいという分析結果が出てきた。このような解析の結果を活用してこの研究では三三通の手紙が書き写される過程で分岐していった系統樹を作成している。

あらためて断るまでもなく、「幸運の手紙」それ自体は無機物であるが、あたかも生物のようなふるまいを観察することができる。このような思考は、民俗学ではなじみ深いものだ。ここで柳田国男が口承文芸をしばしば植物の隠喩で捉えようとしたことを思い出したい。昔話について「空中に浮遊するところのいろいろの種の種は、たとえば歳月の久しきままに來たつてこれに附着し、咲き蔓延してついに石の面を緑ならしめた。〔中略〕昔話の種はもと微細なる胞子のごときもので、夙に散乱して繁殖の地を求めていたらしい」と述べている。口承文芸の成長を媒介したのが口と耳であるとするならば、「幸運の手紙」の場合は読み書き能力である。同一の文章が書き写されることによって繁殖し伝播していく。あるいは書き写す際に無意識のうちに間違えたり、意図的に書き換えることによって伝播の過程で変容していく。そして面白い話を求める心が成長を促したように、幸福を願い不幸から免れたいとする人間誰しも思う心が「幸運の手紙」を連鎖させていき、その成長をうながした。

本稿もまた「幸運の手紙」の成長の過程に注目するものだが、ベネットらの研究のように個々の事例の相互関係を分析し進化の系統樹を作成した作業とは異なり、より長い時間軸で考察する。本稿において行いたいと考えているのは、すでに英語圏で流通していた、いわば生物に喩えるならば外来種である「幸運の手紙」がどのようにして日本に持ち込まれて帰化し、日本においてどのような変異が起きどのように進化したのかをたどることである。日本語という孤立した言語文化圏を形成している言語に翻訳されたことによって、あたかもガラパゴス諸島の生態系のように独特な進化を遂げていった「幸運の手紙」とその変異の事例を見ていくことにしたい。そして各時代の「幸運の手紙」とそれに対する人々の反応を検討することを通じて、当時の世相の一面に光をあてていくことにしよう。

一、日本での発生

「幸運の手紙」はいつ頃からどのようなようにして発生したのだろうか。まず近代日本の文化のはじまりについて調べる際のセオリー通りに、石井研堂の『明治事物起源』をひも解くことから始めることにしたい。そこでは「幸運の為に」という項目で次のように書かれている。

幸運の為に

大正十五年の夏、『貫下の幸運の為に』と題し、『この手紙を受け取つたら、早速友人三人に対し、之と同様の文句にて発信せられたし。幸運立るに來るべく、若し発信せざれば悲運來らん云々』受信人も薄気味あしき為め、いや／＼ながらも発信するもの、其迷惑察するに余りあり。友人に三通出せば二回目九通、三回目には二十七通、四回目には八十一通といふ莫大なる郵書の氾濫を見るに至るべく、知名の士は受信の数も多く悲鳴を揚ぐるに至る。警視庁に於ては、同年七月赤坂青山南町吉田興作外六名に対し罰金五円を科したるを始め、各署に於ても極力其発信者を罰したるが為め、いつとはなしに終息を告げたり。

石井研堂は「大正十五年の夏」すなわち一九二六年の夏に「貫下の幸運の為に」と題した呪術が発生し展開したことを述べてその「起源」としている。

しかし実際には、一九二六年をさかのぼること四年前の一九二二年に日本での発生を確認することができる。『東京朝日新聞』一九二二年一月二七日付には「舞込む謎の葉書 薄気味悪い「幸運のため」警視庁でも内偵」という見出しで記事になっている。同記事に掲載されている「幸運の手紙」の写真的文面では、九枚の葉書を書いて差し出すと

九日後に幸運が回ってくるが、連鎖を断ち切ると大悪運が回ってくるかと、葉書を見てから二四時間に行わなければならないこと、米国のある士官から始まって、地球を九度回っていることが記されている。記事には「突然こんな葉書を受取った人の中には何事であらうかと内々不安の念に駆られてゐる人も少なくない、果たして何人が斯うした迷信か悪戯か知らぬが妙な事をする」とある。このように、「幸運の手紙」は一九二二年の一月頃、日常に突如出現したものだ。

かくして、にわかに各家の郵便受けに「幸運の手紙」が続々と届き始めたのである。受取った人々は何事かと訝しがりながらも、しかし幸運を望みあるいは不幸を恐れて手紙を書いた。その結果爆発的に流行していき、すぐに社会問題化していくことになる。『東京朝日新聞』一九二二年一月二九日付には「幸運」の葉書に脅かされる人々 差出人は拘留処分に 一人が九枚宛十回繰返すと三十四枚に達する」という見出しで問題化されている。読者からの投稿として「此葉書を受けて連絡を断ちたるものは凶事來るとあり女子供の勧めに依り神経を休むる為め九葉を差出し申候」とある。また別の学生の投書では「私の家へ叔母の名宛で「幸運の為に」といふ葉書が今朝舞込みました。為に叔母は神経を悩め始めて折角はひりはじめた法華経の信仰を打毀されるほど心配し出しました」という声を紹介されている。このような事態に対し警察は「幸運の手紙」の発信者を警察犯処罰令における「人ヲ誑惑セシムヘキ流言浮説又ハ虚報ヲ為シタル者」として取り締まり、二九日間拘留する方針を示した。

一九二二年の初頭から発生した爆発的な流行はいつの間にか終息したが、一九二六年の夏に再び流行している。石井研堂が『明治事物起源』において「幸運の手紙」の「起源」を大正一五年すなわち一九二六年の夏としたのは、この時が始まりだったと勘違いしたためだろう。

ちょうど再流行した一九二六年に、政治学者の吉野作造の家にも「幸

運の手紙」が舞い込んできた。吉野作造は自分の家に届いたことをきっかけとした時事評論を「幸運の手紙」と題して書いていたので、当時の知識人の反応の一つとして取り上げることになった。「幸運の手紙」が家に届いたのは七月二日のことだった。受取った吉野作造は「近頃馬鹿馬鹿しいことの随一」「遊戯としても極めて馬鹿げたもの」と評しつつも、「之亦罪のない一興」として面白がっている。吉野作造自身は誰にも送らず、中絶すると悪運が来るという脅し文句に淡い不安を覚えながら、色々なものを日記に添付する習慣から追憶の記念として貼り付けている。批判の矛先を向けられたのは、それぞれの発信者ではなく発信者を取り締まる警察に対してであった。せいぜい注意するぐらいにとどめるべきであつて、警察が取り締まることについては「今度のやうな場合は、何れの点から観ても、余計の干渉と謂ふの外はない」と断じている⁽⁶⁾。吉野作造が危惧したのは、民衆が「幸運の手紙」に惑うことではなく、むしろこまごまとした日常生活にまで警察権力が介入して圧迫することだった。大正デモクラシーの時代において民本主義を提唱することも明治文化研究会を組織して民衆の生活文化を明らかにしようとした人物の精神が「幸運の手紙」についての小文にも現れ出ている。吉野作造は警察の介入を批判したが、戦前において警察はたびたび「幸運の手紙」の発信者を取り締まってきた。しかしそれにも関わらず、「幸運の手紙」は死に絶えることなく、爆発的な流行と鎮静化を繰り返しながら日本で繁殖し続けたのである。

二、外来種としての侵入と帰化

「幸運の手紙」は日本で自然発生したのではなく、海外の英語圏においてすでに広まっていたものが日本に入ってきたものである。すでに紹介してきたいくつかの事例でも見られたように、アメリカの一士官からはじまったというフレーズが多くの場合についてまわっている。英語圏に

おいてどのように「幸運の手紙」が始まったのかについては残念ながら確認することはできなかったが、すくなくとも外国で流行していたものが日本に持ち込まれたことは確かである。推察の域を出ないが、おそらく誰か一人を通じて日本に持ち込まれたのではなく、複数のルートがあったのではないだろうか。また、一九二二年といった特定の時期だけではなく、その後もしばしば海外から流入してきたこともいくつかの事例から知ることができる。

最初の流行の真つ最中であつた一九二二年一月三日付の『東京朝日新聞』には「日本文のと違う謎のハガキ 英文だと幸運は七日以後に来る」という見出しで、前年十二月二日にロンドンで消印が押された英文の葉書が写真入りで記事になっている。ただし、九枚ではなく八枚差し出すこと、九日後でなく七日後に幸運が訪れること、地球を三回ではなく八回回まわることなど、数字の箇所に関しては違いがあり、日本に入ってきたものとしてはまた違う異種である。このように外国から入ってきたものが日本語に翻訳されて広まったと思われる。

もう一つ、外国から持ち込まれ日本で廻送されていた「幸運の手紙」の例を見てもいい。警察庁から移管され国立公文書館にて保管・公開されている内務省警保局に関する公文書である「種村氏警察参考資料」第七集に、「ミスター、ケン、ミツハシ宛書簡幸運の手紙」と題して英文の「幸運の手紙」が収められている。資料自体は複写したものであり、筆記体で書かれている。収められた経緯は記載されていないので詳細は不明だが、警察による取り締まりに際して参考資料として収録されたのだと推察できる。「Let us go on smiling and happy through 1926」という文章で終わっているのが、一九二六年に流布していたものだろう。なお、「happy」は、資料自体の表記に従ったものである。明らかなスペルミスであり、正しくはhappyだが、同一の文章を書き写すことを指示する呪術であるならば、誤記もまた資料性を有すると判断

し、おぼえてそのまゝにしてゐる。以下、主要部分を引用することにした。

Mr. T. Ishihara has sent to me.

This good luck letter and I am sending it so not to break the chain of good luck. Among others, I am sending it to you and ask you, as I have been asked not to break The chain. Copy this and send it to nine persons to whom you wish good luck. Write nine letters and sent them within twenty-four hours. The Chain was started by an American officer and should go round the world three times. Do not break the chain for whoever does this will have bad luck. Count nine days and you will find some has been fulfilled since this chain was started. Wish success to you and yours. Let us go on smiling and happy through 1926.

この文章の後、誰から誰に宛てられたのが書かれている。差出人が送ることに宛先を書き加えていくのが、初期の「幸運の手紙」の特徴である。この記録をたどることによって外国でかなり廻送した後に日本にやってきたことがわかる。最初の差出人はCommander Hermerdinから始まっており、それからCommander Crouf、Commander CroufからCh. J. Castilleへとつらつらに、差出しの経路が順次記述されている。日本人と思われる名前が現れるのは、一二人目のMr. Katsutaro Inabataからである。その後は日本人の間で廻送され、一二人目まで終っている。

先にも紹介した吉野作造のもとに舞込んだ「幸運の手紙」は、右の英文の「幸運の手紙」と同種の系統のものを翻訳したのだろうと判断できるほど、内容が似通っている。

この幸運の手紙は、○○通として有名なる○○○○氏よりも送り越されしものにして、小生は幸運の連鎖を破らざらんが為之を貴下及び其他八名の友人に回送いたし候。貴下も亦此手紙を写して十四時間以内に九名の友人に御贈被下度候。此幸運なる連鎖は、米国の一士官より発せられ、三度世界を周るべく候。此連鎖を御破なき様願上候。萬一之を破らるる時は、悪運忽ち其身に到るべく候。

貴下は此手紙を接受して九日以内に何等かの幸運を得らるべく候
(原文は英文なるも○○氏邦訳せり)。

フメーデン氏より、クリフ氏へ、ガスケル氏へ(中略百七十名)、
ローレンス氏へ、○○氏へ、○○氏へ、○○氏へ、○○氏へ、○○
氏へ、○○氏へ、○○氏へ、○○氏へ。

「○○氏」と伏せ字にしているのは知名の日本人の名前が入っていたためだ。はばかりがあるので伏せ字にしたのだろう。この他にも二通もらったという。また数年前に流行った時は外務省の高官や貴族院議員からもらったとも記している。三人目の送り主の例がわかりやすいが、先の英文の「幸運の手紙」では「Castille」であるが、吉野作造が受け取ったものでは「ガスケル氏」と少しずれている。英語の時点での日本語の時点でのなにかはわからないが、書き写していく段階で変化していったことを示す一例と言えよう。

おそらく「幸運の手紙」は、英語圏の人が日本人の知人に差出すことによって日本に持ち込まれたと思われる。吉野作造が外務省高官や貴族院議員からもらったと述べているように、侵入は外国に知人がいる上層階級から始まったのではないだろうか。ルートも単一ではなく複数あったはずだ。そしてある段階で日本語に翻訳されたことにより、日本に定着していく。いわば外来種が日本に帰化していったのである。そして日

本語で廻送されるようになったことにより、グローバルな英語圏のネットワークとは切り離され独自に進化していくようになる。次節ではその変異の諸相を見ていくことにしたい。

三、変異

日本に入ってきた「幸運の手紙」は書き写されていく過程で様々なヴァリエーションが生まれていった。始めた人物、書き写して送らなければならぬ人数、送らなければならない期間、幸運が訪れた例などが入れ替わり、削り取られ、書き加わっていった。

さらには戦後になると「幸運の手紙」から「不幸の手紙」という系統が枝分かれをして勢力を拡大していった。もともとは手紙を差し出し連鎖し続ければ幸運が訪れるが連鎖を断ち切れれば不幸が訪れるものだった。しかし、幸運が訪れるという要素が消えてしまい不幸が訪れるので誰かに差し出して逃れなければならないと命令するものが広がって回るようになったのである。

「不幸の手紙」が世に現れ始めるのは一九七〇年の秋の頃からである。『読売新聞』一九七〇年一月二六日付では「不幸の手紙―閑話二題」と題してこの問題を取り上げている。あなたのところで止めると、かならず不幸が来る。五十時間以内に二九人にこの手紙を出して下さい、と指示する文面であり、十月初旬以降読者からの訴えは後を絶たず、すでに百数十通に達しているところである。

「不幸の手紙」の特徴のひとつは大人のみならず小学生・中学生などの子どもの世界でも盛んに行われていったことである。大正時代以来「幸運の手紙」はもっぱら大人のあいだで交わされていた。子どもの世界で行われ始めるのは一九五四年頃からだ。不幸の到来を直接予言するものであることもあって、子どもたちは恐怖し瞬く間に大増殖していった。「不幸の手紙」の子どもの世界への侵入と拡大は、高度経済成長期

に学校が怪談を語る場になっていったことも関わっているだろう。

一九七七年に発表された藤子・F・不二雄によるマンガ『ドラえもん』の「不幸の手紙同好会」のストーリーはその名の通り、十日以内に二九人に出さなければ不幸が訪れるとする「不幸の手紙」を題材にしたものだ¹⁰⁾。結末は、未来から来た猫型ロボットであるドラえもんの道具を用いて発信者を懲らしめるといふ、「不幸の手紙」を差し出すことを戒めるものだが、マンガの題材に取り上げられるほど、「不幸の手紙」は子どもたちのあいだに浸透していたのである。

さて、一九二二年に外国から日本に侵入した「幸運の手紙」が一九七〇年代になると「不幸の手紙」が分岐して勢力を拡大していった過程を見てきたが、ここで再び時計を巻き戻して時間を大正時代に戻そう。様々な変異を遂げて生まれていった亜種の諸相を見ていくことにしたい。

変異のパターンとして人名や数字、細かい表現等が書き写していく過程で変化していくものもあるが、ここでいくつか取り上げたいと考えているのはあたかも生物が別の環境に進出し姿を変えて適応していったように、文章の変化にとどまらない形態の変化が起った事例である。「幸運の手紙」についてはジャーナリストであり世相風俗の研究家でもあった宮武外骨が『奇態流行史』において取り上げている。この中で宮武外骨は、アメリカのある士官から始まり同じ文面を九枚書いて差し出すと九日後に幸運が訪れるという定型的なものが流行したことを紹介した上で、さらに宣伝メディアへと変わっていったことを記している。宮武外骨によれば、普通選挙の宣伝文や、商店が商品の売るための広告文となっていたという¹¹⁾。一人が複数の人間に手紙を差し出す「幸運の手紙」の形式は、ねずみ講式に同一文章の回覧者を増やしていく宣伝メディアでもある。しかも郵便制度を利用するということは、回覧者が同一の宣伝文を書き写し次の回覧者へ自費をもって発送するものであり、

しかもその手紙を運ぶのは郵便配達夫なので、宣伝したい者は一度発信してしまえばそれ以降は印刷費や配送料等の経費がかからない。安上がりの宣伝メディアでもある利点を利用して、当時活発に展開していた普通選挙運動の宣伝や商店の広告などにも「幸運の手紙」の形式が用いられた。『奇態流行史』は一九二三年八月に発行された本であるから、「幸運の手紙」は日本にやってきて一年半ほどで変異し様々な亜種が生まれていったのである。

宮武外骨はまた、次のような事例もあつたことを報告している。

家内安全の為に―今年は悪疫が流行します、これを免れる法をお伝えします、弘法大師の作られたイロハ歌を紙に書いて仏壇に供へ、南無大悲遍照金剛と二十一回唱へ、又此葉書を受取つた後二十四時間内に、此通りを葉書に記して三人以上の知人にお出しなさい、若し之を守らぬ時は今年中に病難がありますぞ。⁽¹²⁾

この事例は「幸運の手紙」が、いわゆる「在来種」である弘法大師にまつわる呪いと「交雑」したものである。⁽¹³⁾ 同じようなものとして、一九二五年七月一六日に東京に住む性科学者である澤田順次郎の家に届いた「弘法大師の教えにより今秋奇病が流行するが三日中に他の七軒へ同様の葉書を出せば罹らない」という葉書がある。⁽¹⁴⁾

アジア・太平洋戦争の時代において「幸運の手紙」は平和への願望を祈願し実現するための連帯と広告の手立てともなった。内務省警保局が発行する『特高月報』には、共産主義者や先鋭的な右翼の動向とともに当局が取り締まった一般民衆の反戦・不敬言辞なども掲載されているのだが、その一九四一年八月分では「幸運の手紙」を警戒取締の対象として扱い注意を促している。七月一〇日付の「神戸中央」の消印が押された横浜市の貿易会社に宛てられた英文タイプライターの手紙で、定型で

はアメリカの一士官から始まったところだが「アフリカに於てドゴール麾下一佛國士官が始めた」とあること、またルーズヴェルトが大統領に当選する幸運が訪れたことなどをもって「文面の内容には巧に英米乃至は猶太流の基督教的平和主義を包伏せしめつ、あり」と指摘し、国民に英米依存の思想を導入するための謀略行為だとしている。⁽¹⁵⁾ もっともこの事例は、文面をめぐって警察側が過度に反体制的な思想を読み込んでしまった過剰反応ではないかという疑いも否定しきれない点も残るだろう。

より直接的に戦争の終息と平和を願った「幸福の手紙」も存在した。もはや敗色も濃くなつた一九四三年に大阪のある男性のもとには「我々はもう戦争はあきあきしました。一日も早く平和の来る様神様に御祈り致しませう、此の葉書を受取つた方は此の通り書いてあなたの知人二人にお出し下さい。早く平和の日がきます。」という文面の葉書が届いている。⁽¹⁶⁾ 民衆にとつての幸福が安らかな暮らしだとすれば、戦時下において「幸運の手紙」がおびる呪力は戦争の終結と平和な世の到来のために発揮されるものとなつたのである。

おわりに

本稿で述べてきた「幸運の手紙」の繁殖と進化の過程を、あらためて整理することにしよう。すでに国外の英語圏において広まっていた幸運の手紙が日本に持ち込まれたのは、一九二二年の一月のことである。当初は英文のものが直接日本に入ってきたが、やがて日本語に翻訳されて定着するようになった。そして日本語圏の中で人から人へと郵便制度を介して伝播していく過程で様々なヴァリエーションを生んでいった。また一九七〇年代になると「不幸の手紙」という別系統の種が枝分かれしていき勢力を拡大していった。また「幸運の手紙」にはしばしば変異が起つた。普通選挙の実現や商店の広告、戦争終結と平和ための祈願と宣

伝のメディアともなっていくたのである。

「幸運の手紙」をめぐることは、成就する願いや、手紙を差し出す人数、何日以内に差し出すのか、何回地球を回るのか、といった要素は次々と変わっていく。その中で変わらないものは二つであった。一つは、郵便制度を用いるという外形的な仕組みである。そしてもう一つが、同一の文章を書き写すという行為である。各要素がいかに変化しようとも、同一の文章を書き写すことを命じる部分は変わることにはなかった。だとすれば「幸運の手紙」を一種の生物として見立てたとき、その生命の本質は同一の文章を書き写す行為にあるだろう。人は誰しも文字を習うときには他者が書いた文字を書き写すことから始めるが、しかし多くの人間にとつて書き写す行為はいつまでも慣れることはない。大人になっても少なからぬ心理的な不安や緊張を伴うものである。誤字脱字はないかと確認しつつ書かなければならない。中には数字や人名を面白半分に変えようとする人間もいるかもしれないが、それでもその他の部分については書き写すことを強いられる。書き写す行為こそが、「幸運の手紙」の繁殖と進化を用意していった。

だとすればインターネットを通じて電子メールが行き交いパソコンで文字を入力することが普及した現代においては、「幸運の手紙」はもはや手書きの時代ように成長することはない。なぜならば、パソコンにおいて同一の文章を書き写す際にはかつての不安や緊張はまるで存在せず、指先を少し動かして宛先を変えたりコピー・アンド・ペーストしたりするだけで数秒もかからぬうちに終わってしまうからだ。今日もなお「幸運の手紙」的なものはインターネット上に存在するが、もはや郵便メディアを介した時代のように様々な亜種を生んでいくことはないのではないのかと思われる。「幸運の手紙」はその成長を読み書きの実践に依存した呪術だったのである。

註

- (1) たとえば、原口庄輔の論文「怪情報考(その一) 幸福の手紙」(『筑波英学展望』第一六号、一九九七年)の分析はその非合理性を明らかにすることを通じて社会への危険性を警鐘している。
- (2) 岩倉千春・大島広志・高津美保子・常光徹・渡辺雅子編著『幸福のEメール―日本の現代伝説』白水社、一九九九年
- (3) C・H・ベネット、M・リー、B・マ「幸福の手紙に潜む進化のルール」『日経サイエンス』九月号、二〇〇三年
- (4) 柳田國男「笑いの本願」『柳田國男全集』第九巻、ちくま文庫、一九九〇年、二七四～二七五頁
- (5) 明治文化研究会編『明治文化全集 別巻明治事物起源』日本評論社、一九九九年、八六～八七頁
- (6) 吉野作造「主張と閑談 第五輯 問題と解決」文化生活研究会、一九二六年
- (7) 同前、二九二～二九三頁
- なお文中に「十四時間以内」とあるのは出典元に習ったものであるが、「幸運の手紙」の形式からいえば「二十四時間以内」のほうが妥当だろう。掲載時の誤植なのか、もともと「二十四時間以内」であったものが吉野作造の元に届くまでに間違えて書き写されたのか判断がつきがたいため、原文の通りとした。
- (8) 「死の恐怖 幸運の手紙 子供の世界に侵入」十二時間以内に出さねば」とおろろ『読売新聞』一九五四年十月一日付
- (9) 常光徹「学校の怪談―口承文芸の展開と諸相」ミネルヴァ書房、一九九三年
- (10) 藤子・F・不二雄『ドラえもん』第一五巻、小学館、一九七八年
- (11) 宮武外骨『奇態流行史』(『宮武外骨著作集 第四巻』河出書房新社、一九八五年、四四一頁)
- (12) 同前
- (13) 書き写すことによつて不幸から逃れることができるという点では、江戸時代以降にしばしば出現したクタンや神社姫などの予言する妖怪とも通じる怪異である。悪疫の流行などを予言するこれらの妖怪は、その姿を書き写すことによつて災いから逃れることができるとなっている。ただだからといって、そこに超時間的な日本人の心性を見出して結論付けてしまうのは性急だろう。むしろ佐藤健二が「クダンの誕生」(『流言蜚語―うわさ話を読みとく作法』有信堂高文社、一九九五年)においてクタンをリテラシーの文脈に位置付けながら「クダンの怪物性は、あるいは文字というかたちで『書かれたもの』がもつ、社会的な「呪力」からたちのぼってきたものかもしれない(一九二～一九三頁)」とい

う示唆と連関する可能性を指摘しておきたい。

(14) 「また『葉書七枚』―澤田順次郎氏邸へ舞込んだ」『読売新聞』一九二五年七月一七日付

(15) 『特高月報』内務省警保局保安課、一九四一年八月（荻野富士夫編『特高警察関係資料集成』不二出版、一九九四年）

(16) 井形正寿「反戦投書―戦時下、庶民のレジスタンス」『世界』第七七七号、二〇〇八年

なお、この葉書は大阪府警察本部の八尾警察署特高係に勤務していた著者が、終戦時に関係資料の焼却を指示された際に反戦・反体制的な手紙・葉書とともに持ち帰ったもののひとつである。

（国立歴史民俗博物館特任助教）

（二〇一一年七月一四日受付、二〇一一年一月二一日審査終了）